

<p>コース名 発達診断方法論コース</p>	<p>2018 年度回数 全6日6コマ</p>	<p>担当者 中村隆一</p>
<p>授業の概要</p> <p>方法論コースでは、実際に発達診断に従事しようとする（あるいは、現にしている）人々を対象にしています。受講にあたって、発達保障学校個人の発達の系概論コース、基礎理論コースなどを受講しておられると内容が分かりやすいと思います。</p> <p>主として発達の階層－段階理論に拠りつつ「発達認識の方法論」（実際の診断手技という意味での「方法」とはちがいます）という観点から、次のような柱を想定し、その中でいくつかを選択して学びます。</p> <p>発達診断の主な目的はいうまでもなく一人ひとりの発達の状態の理解にあります。それを実証的にすすめることは、ますます重要になっています。そのためには、日々進歩している研究上の新しい知見を反映していると同時に、具体的な手続きにおける妥当性も欠かせません。同時に、発達診断は、発達臨床としての側面を持っていますから、その手続きや方法も個別性において妥当性が問われます。いいかえると、発達の姿をそのひとを援助するために、どのように把握し提示しうるのかが問われています。</p> <p>現実の発達診断では、仮説を設定し、その検証手続きを吟味し、その結果を評価し、発達の状態について総合的な評価をおこなう、ということになります。この一連の過程について方法論という面から深めます。</p> <p>おおまかには下記のような内容を想定していますが、受講者にあわせて毎年異なっていますので目安としてご理解ください。</p>		
<p>授業の流れの一例（スケジュール・内容等の計画）</p> <p>第1回：発達の階層－段階理論と発達診断</p> <p>ここでは、発達の階層－段階理論が着想され発展してきた経過も念頭において、</p> <p>①発達検査・知能検査の意味と限界点（1905年にビネーの開発した知的水準の診断法1の論文、ビネー「新しい児童観」1911 など）</p> <p>②③発達の階層－段階理論の概要（主として「静かな法則性」と言われるレベルまで）。</p> <p>第2回：発達診断における仮説と検証</p> <p>①生育歴、主訴から発達診断における仮説に</p> <p>②知能検査・発達検査下位項目以外の着目点の例示</p> <p>③発達相談結果記録</p> <p>第3以降：次元可逆操作の各時期の発達診断下位項目</p> <p>1 次元可逆操作・2次元形成期</p> <p>2 次元可逆操作・3次元形成期</p> <p>3 次元可逆操作</p> <p>1 次変換可逆操作</p>		
<p>質問用のメールアドレス r-nakamura@j-ihd.com</p> <p>テキスト 中村隆一『発達の旅 人生最初の10年 旅支度編』（クリエイツかもがわ2013-2）</p> <p>参考図書 『子どもの発達と診断1～5』（大月書店）</p>		